

2025年11月16日

## 2025（令和7）年度「大学院の教育・研究等に関するアンケート」総括

福山大学研究科長等協議会議長 今 重之

本学大学院生を対象に、大学院の教育・研究等に関する2025（令和7）年度のアンケート調査を実施した。本学における大学院教育の改善に資するため、同調査の集計結果を総括する。アンケート結果は、2026年1月～2月に研究科ごとに大学院生に対してフィードバックを行い、総括は3月末までに福山大学HP上で公表する。

### 結果の概要

大学院進学目的については、「研究」および「専門分野の知識」を深めたいという回答が合わせて71.0%、次いで「資格取得」が16.1%となり、これらが学生の主な動機であることが確認された。

教育面では、3つのポリシー（AP、DP、CP）やシラバスの理解が進んでおり、授業内容や成績評価への納得感も得られている。また、指導教員とのコミュニケーションや助言についても全体的に高い評価を受けている。

研究進捗に関しては、64.5%の学生が「順調」と回答する一方で、約3分の1の学生が中立または否定的な回答を示した。教員との関係は良好であるが、今後は学生自身が研究の進捗をより実感できるような指導上の工夫が望まれる。また、施設・設備環境には一部改善の必要性があり、特に奨学金制度などの経済的支援は例年低い評価に留まっているため、継続的な課題となっている。

総合的な満足度は昨年度より上昇した。今後もこの結果に慢心せず、大学院の教育・研究レベルを高めていくことこそが、我々教員の使命である。

### 調査の方法と内容

- ・実施期間：2025（令和7）年11月10日（月）～11月28日（金）
- ・実施方法：ゼレツソを用いて実施。
- ・調査対象：大学院在籍学生は33名であり、アンケート対象者33名中31名から回答があった（回答率93.9%）。研究科別の回答率は、経済学研究科6名中4名（66.7%）、人間科学研究科10名中10名（100%）、工学研究科14名中14名（100%）、薬学研究科博士課程3名中3名（100%）であった。回答した31名の学年別内訳は、修士課程1年次または博士前期課程1年次：17名、同2年次：10名、博士課程2年次または博士後期課程2年次：2名、同3年次：2名であった。
- ・調査内容：昨年度のものを踏襲した。

## 集計結果

### I. 大学院進学の目的について

#### 集計結果

##### 1. 大学院進学の主たる目的について（質問1）

進学の主たる目的（単数回答）は、「研究を深めたいから」が45.2%となり、昨年度の25%から大幅に増加した。次いで「専門分野の知識を深めたいから」が25.8%（昨年度25%）、「資格を取得したいから」が16.1%（昨年度39.3%）となった。

また、主たる目的に準ずる目的としては、「専門分野の知識を深めたいから」が58.1%（昨年度45%）、「研究を深めたいから」が32.3%（昨年度20%）といずれも高い割合を示している。このことから、学生の進学目的が資格取得から知識や研究の探求にシフトしていると考えられる。

##### 2. 大学院進学時の AP（アドミッション・ポリシー）の理解度（質問2、平均4.29）

「大学院進学時にアドミッション・ポリシー（AP）を理解していたか」という設問に対し、肯定的回答（「強くそう思う」「だいたいそう思う」の合計）は83.9%に達した。昨年度の85.7%と比較すると微減しているものの、中立・否定的回答の16.1%を大きく上回っている。今後は、各研究科における受験指導や入試説明会の充実を図り、APの理解度をさらに向上させる必要がある。

### II. 大学院の授業について

##### 1. 研究科の DP（ディプロマ・ポリシー）・CP（カリキュラム・ポリシー）と授業科目の構成（質問3、平均4.39）

両ポリシーに照らした授業科目の構成が適正であるかについて、「強くそう思う」と「だいたいそう思う」との回答は、それぞれ41.9%（昨年32.1%）、54.8%（昨年60.7%）であった。この2つを合わせた回答は、昨年度92.8%から96.8%とさらに増加し、高い水準を保っている。5点満点での評価（平均値）は、4.39（昨年4.21%）である。各研究科の授業科目構成もDP、CPに沿っていると判断されている。学部時代からのDP、CPの理解が進んでいることも要因と考えられる。

##### 2. シラバスが適切かどうか（質問4、平均4.42）

「強くそう思う」45.2%（昨年35.7%）、「だいたいそう思う」が51.6%（昨年57.1%）と回答している。両方を合わせると96.8%（昨年92.8%）となり、ほとんどの院生が適切と感じていると言える。たゆまぬPDCAサイクルが機能していることが結果として現れたと判断できる。

### 3. 授業内容とシラバスの整合性（質問5、平均4.48）

授業内容がシラバスの内容をカバーしているかどうかについて、「強くそう思う」が51.6%（昨年39.3%）、「だいたいそう思う」が45.2%（昨年57.1%）であった。両方を合わせて100%（昨年96.4%）となった。どの授業内容もシラバスの内容をかなりカバーできていると考えられることから、今後もこの傾向を維持することが重要と考えられる。

### 4. 授業方法とシラバスの整合性（質問6、平均4.58 質問7、平均4.55）

授業回数や授業時間はシラバスの記載のとおりかという質問に対して、「強くそう思う」と回答した人が58.1%（昨年39.3%）、「だいたいそう思う」が41.9%（昨年53.6%）であった。これら合計は100%（昨年92.9%）であり、全体としてシラバスに記載された通りの授業回数や授業時間は厳守されていると考えられる。

授業方法がシラバスに照らして適切であったかの質問に対しては、平均4.55（昨年4.25）であったことから、概ね授業方法全般としては評価されていると思われる。今後も適切にシラバスに沿って授業を実施していく必要がある。

### 5. 成績評価方法の明確性（質問8、平均4.48）

シラバスや教員の説明等を通じて成績評価方法が明確であったかという設問に対し、「強くそう思う」が64.5%（昨年度46.4%）、「だいたいそう思う」が32.3%（昨年度42.9%）となり、肯定的回答の合計は96.8%に達した。特に「強くそう思う」の割合が大幅に増加しており、成績評価の基準は学生に十分周知されていると評価できる。

### 6. 成績評価の妥当性（質問9、平均4.61）

成績評価が納得のいくものだったかどうかの質問では、「強くそう思う」が64.5%（昨年39.3%）、「だいたいそう思う」が32.3%（昨年57.1%）と、両方で96.8%（昨年96.4%）となっており、成績評価も妥当であると判断されている。質問8とあわせ、成績評価の明確性、妥当性は高く評価されている。

## III. 研究指導ならびに研究状況について

### 1. 研究テーマについての指導教員等との話し合い（質問10、平均4.55）

研究テーマの決定に際し、指導教員や副指導教員と十分な話し合いができたか質問したところ、「強くそう思う」が71%（昨年度78.6%）、「だいたいそう思う」が19.4%（昨年度17.9%）となり、肯定的回答の合計は90.4%であった。昨年度の96.5%と比較すると減少しており、「あまりそう思わない」という回答も6.5%見られた。多くの研究科で概ね十分な話し合いが行われているとは言えるが、今後はより丁寧な対応を心がけ、肯定的回答100%を目指す必要がある。

2. 指導教員等による研究計画・研究指導に関するガイダンスやオリエンテーション（質問 11、平均 4.52）

指導教員等は DP にもとづく具体的な研究計画や指導について、ガイダンスやオリエンテーションをしたかという質問に対して、「強くそう思う」と回答した人は 61.3%（昨年 64.3%）で、「だいたいそう思う」が 32.3%（昨年 32.1%）であり、肯定的な回答は 93.6%（昨年 96.4%）と高い値であった。計画に対するガイダンスやオリエンテーションに関しても大学院生に納得する質および量でなされていると評価できる。

3. 学位論文の審査手続きや審査基準に関する説明（質問 12、平均 4.39）

指導教員等から審査手続きや基準について説明を受けたかという設問では、「強くそう思う」が 64.5%（昨年度 57.1%）、「だいたいそう思う」が 12.9%（昨年度 35.7%）となり、肯定的な回答は合計 77.4%に達した。しかし一方で、「どちらとも言えない」という回答も 19.4%（6 名）見られた。審査基準や手続きの理解は研究遂行上不可欠であることから、今後は全学生に行き渡るよう、より丁寧な説明を徹底する必要がある。

4. 研究計画の作成における指導教員の指導（質問 13、平均 4.65）

研究計画を立てるにあたって指導教員の指導を受けたかという質問に対して、「強くそう思う」が 71%（昨年 67.9%）、「だいたいそう思う」が 22.6%（昨年 28.6%）で合計 93.6%（昨年 96.5%）と高い評価が続いている。今後も引き続き、研究計画に基づいた研究指導が望まれる。

5. 学位論文の作成・公表に対する教員の指導・助言（質問 14、平均 4.71）

学位論文の作成・公表に向けて指導教員等は指導や助言を行ったかの質問では、「強くそう思う」が 77.4%（昨年 64.3%）、「だいたいそう思う」が 16.1%（昨年 32.1%）で合計 93.5%（昨年 96.4%）と良好であり、教員の指導・助言は適切になされていると評価できるが、「どちらとも言えない」が 6.5%（2 名）あった。

6. 研究の進捗（質問 15、平均 3.71）

研究が順調に進んでいるか質問したところ、肯定的回答（「強くそう思う」「だいたいそう思う」の合計）は 64.5%となり、昨年度の 64.3%とほぼ同水準であった。内訳を見ると、「強くそう思う」が 29%（昨年度 17.9%）と増加した一方で、否定的な回答（「あまりそう思わない」「全くそう思わない」）も計 19.3%見られる。今後は、院生自身が研究の進捗をより実感できるよう、指導方法にさらなる工夫が求められる。

7. 問題解決能力の修得（質問 16、平均 4.19）

研究の遂行を通じて、問題を発見し解決する能力が身についていると思うかという質問

では、「強くそう思う」が41.9%（昨年度25.0%）、「だいたいそう思う」が41.9%（昨年度57.1%）となった。「強くそう思う」の割合が昨年度より大幅に増加しており、肯定的回答の合計も83.8%と高い水準を維持している。全体として教育効果の向上が見られるが、一方で「あまりそう思わない」が6.5%あることから、引き続き日々の丁寧な指導を通じて、大学院生の問題解決能力の向上に取り組む必要がある。

#### 8. 学修時間の確保（質問17、平均4.06）

授業以外の学修時間を十分確保しているかという質問では、「強くそう思う」が45.2%（昨年28.6%）、「だいたいそう思う」が35.5%（昨年42.9%）、「どちらとも言えない」が3.2%（昨年14.3%）、「あまりそう思わない」が12.9%（昨14.3%）、「全くそう思わない」が3.2%（昨年0.0%）であった。「強くそう思う」と「だいたいそう思う」の合計が80.7%（昨年71.5%）と昨年度よりも増加している。1週間の平均学修時間は、研究科や個人によって異なる傾向がある。

### IV. 研究環境について

#### 1. 研究上必要な施設や設備の整備状況（質問18、平均4.35）

研究を遂行するために必要な演習・実習・実験の施設や設備は整備されていると思うかに対して、「強くそう思う」が54.8%（昨年21.2%）、「だいたいそう思う」が32.3%（昨年42.4%）、「どちらともいえない」が6.5%（昨年24.2%）、「あまりそう思わない」が6.5%（昨年12.1%）、「まったくそう思わない」が0.0%（昨年0.0%）であった。肯定的な回答が87.7%あった。「あまりそう思わない」の回答が6.5%（2人）あることから、最先端の研究が要求される大学院の研究環境は、計画的に整備されることが望ましい。

#### 2. 研究上必要な情報収集環境（質問19、平均4.32）

研究上必要な情報収集環境（学術図書・雑誌、ネット、ソフトウェア等）は整備されていると思うかという質問では、「強くそう思う」が51.6%（昨年35.7%）、「だいたいそう思う」が35.5%（昨年39.3%）と合計87.1%（昨年75.0%）であった。否定的回答は6.5%あった。情報収集環境は研究に大きく支障を生じる状態ではないと判断できるが、否定的回答が6.5%存在することより、今後も計画的に更新に取り組むことが必要であると考えられる。

#### 3. 図書館の利便性（質問20、平均4.13）

学修に際し、図書館は利用しやすいと思うかの質問に対して、「強くそう思う」が45.2%（昨年46.4%）、「だいたいそう思う」が32.3%（昨年28.6%）であり、「どちらともいえない」が12.9%（昨年17.9%）、「あまりそう思わない」が9.7%（昨年7.1%）であった。「全くそう思わない」の回答はなかった。研究で必要となる学術論文や専門書に関する

る整備は今後も必要と考えられる。

#### 4. 奨学生（金）制度による経済的支援（質問 21、平均 3.84）

内外の奨学生（金）制度による経済的支援は十分であると思うかの質問では、「強くそう思う」が 38.7%（昨年 17.9%）、「だいたいそう思う」が 32.3%（昨年 53.6%）、「あまりそう思わない」が 6.5%（昨年 10.7%）、「まったくそう思わない」が 9.7%（昨年 3.6%）であった。「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の合計が 16.1%（昨年 14.3%）あり、一層の充実を望んでいることが示唆される。大学院生の入学者数増加のためにも経済的支援の充実が望まれる。

#### 5. TA（ティーチング・アシスタント）・RA（リサーチ・アシスタント）制度（質問 22、平均 4.35）

大学院生としてこれらを経験することは、経済的な利得の点を除いてもプラスになると思うかの質問に対して、「強くそう思う」が 48.4%（昨年 42.9%）、「だいたいそう思う」が 38.7%（昨年 35.7%）であり、肯定的にとらえる人が 87.1%（昨年 78.6%）と多い。各研究科で TA・RA に際しての指導がそれなりに適切に行われた成果と考えられる。TA に対するオリエンテーション、TA 実施後の指導等による制度の充実も行われているが、さらに大学院生の意見にも十分耳を傾け、TA 制度の運用を研究科と院生双方にとって有益なものとする継続が重要である。

#### 6. 教員とのコミュニケーション（質問 23、平均 4.58）

日常生活や研究を進める上で、教員とのコミュニケーションは適切にとれていると思うか、という質問では、「強くそう思う」が 64.5%（昨年 53.6%）、「だいたいそう思う」が 29%（昨年 35.7%）と両方で 93.5%（昨年 89.3%）となり、昨年度よりは肯定的な回答が幾分増加し、一定の評価はできると考えられる。また、指導教員のみならずスタッフの多くとコミュニケーションがとれているものと推察される。

#### 7. 他の院生・学生との人間関係（質問 24、平均 4.26）

日常生活や研究を進める上で、他の大学院生・学生等との人間関係は、円滑な状態にあるかという質問では、「強くそう思う」が 51.6%（昨年 32.1%）、「だいたいそう思う」が 35.5%（昨年 46.4%）であり、91.6%が円滑と考えている。院生同士の交流は円滑に行われていと考えられる結果である。

#### 8. 教員の対応（質問 25、平均 4.61）

日常生活や研究を進める上で、教員の対応は適切かの質問では、「強くそう思う」が 67.7%（昨年 53.6%）、「だいたいそう思う」が 25.8%（昨年 39.3%）であり、大半が肯定

的回答をしている。

#### 9. 職員の対応（質問 26、平均 4.45）

日常生活や研究を進める上で、職員の対応は適切かの質問では、「強くそう思う」が 58.1%（昨年 39.3%）、「だいたいそう思う」が 35.5%（昨年 32.1%）であり、教員の対応の評価より幾分下回ってはいるが、比較的高い評価と思われる。

#### 10. 大学院の教育・研究指導體制（質問 27、平均 4.29）

大学院の教育・研究指導體制は、総合的には満足できると思うかという質問に対して、「強くそう思う」が 41.9%（昨年 25.0%）、「だいたいそう思う」が 45.2%（昨年 67.9%）であり、平均点が昨年度の 4.18 より向上し、肯定的評価が得られた。「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の回答が両者とも 0%であったものの「どちらとも言えない」が 12.9%あり、現在の教育・研究指導體制をさらに強化することが必要である。

#### 総括

2017（平成 29）年度より学生ポータルサイト「セレッソ」で調査に回答するようになり、匿名性は確保されるが、回答率が低下する懸念があった。回答率は 2018 年度 83.6%、2019 年度 78.7%、2020 年度 91.0%、2021 年度 88.9%、2022 年度 85.4%、2023 年度 91.7%、2024 年度 87.5%と推移してきたが、今年度は 93.9%であった。院生のアンケートに対する積極的な姿勢があったことが主ではあるが、アンケート期間中、研究科長を通してアンケートへの回答の呼びかけを実施したことの効果もあると考えられる。以下に、結果のまとめを大項目ごとに行う。

#### I 大学院入学の目的について（質問 1、2）

大学院入学の目的として、全体的には「研究を深めたいから」と回答する割合が高かった。準ずる入学目標として「専門分野の知識を深めたいから」との回答が多かった。また、多くの院生は、アドミッション・ポリシーを理解した上で入学している。

#### II 大学院の授業について（質問 3～質問 9）

研究科の DP（ディプロマ・ポリシー）・CP（カリキュラム・ポリシー）と授業科目の構成、シラバスの策定、授業内容・時間・方法との整合性、成績評価のいずれの項目も高い評価が得られており、ポリシーの概念から具体的な実施に至るまで問題はないと評価できる。ただし、今後もポリシーの概念から具体的な実施に関して各教員が一層の工夫をすることが望まれる。

#### III 研究指導ならびに研究状況について（質問 10～質問 17）

研究テーマについての指導教員等との話し合い、指導教員等による研究計画・研究指導に関するガイダンスやオリエンテーション、学位論文の審査手続きや審査基準に関する説明、研究計画の作成における指導教員の指導、学位論文の作成・公表に対する教員の指導・助言は、いずれも良好な評価が得られており、これらに関してほぼ問題はないと考えられる。研究の進捗に関しては、研究が順調に進んでいる人の合計が64.5%であり、昨年の64.3%とほぼ同等である。また「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」あわせて19.3%の大学院生が回答しており、順調ではないという回答が昨年度の17.9%よりわずかに増加している。今後、否定的な回答がゼロになるよう、教員の日々の指導により、研究の順調な進捗状況を実感できる様々な工夫が望まれる。

#### IV 研究環境について（質問 18～質問 27）

演習・実習・実験の施設や設備、情報収集環境や図書館に関して、概ね肯定的であった。ただ、奨学生（金）制度による経済的支援のアンケート結果は3点台と低い評価点である。大学院入学者数増加のためにも経済的支援は重要と考えられ、大学院生が一層の充実を望んでいることを示唆している。経済的支援の役割も担う質問22の「TA（ティーチング・アシスタント）・RA（リサーチ・アシスタント）制度は、経済的な利得の点を除いてもプラスになる」は4.35と高い平均点であることから、TA・RA制度は経済的・教育的いずれの側面でも有効であると評価できる。

最後の今年度の大学院の教育・研究指導体制の総合的満足度は4.29であり、昨年度の4.18を上回る評価であったが、今後、大学院生の総合的満足度をさらに高めることが望まれる。大学院においては、指導教員の濃密な指導形態で研究が行われているが、研究科教員が研究室の垣根を越えて指導をしたり、教職協働で大学院生をサポートしたりするなどの新しい取り組みを行えば、大学院の教育・研究指導体制の満足度（質問27）をさらに向上させることになることが期待できる。教育・研究のいずれにおいても、教員とのコミュニケーションに関する評価は非常に高く、きめ細やかな指導が常日頃から行われていることが評価に現れている。今後は、大学院の教育・研究をさらに充実させることで、大学院生の人数を以前のように増加させることが肝要である。

#### V 自由記入

今年度の自由記入への書き込みに、時間的制約、Wi-Fi環境、職員の対応などに関する記述があった。今後、このような意見に対しても丁寧に対応する必要があると考えられる。